陰部ケア実施後の爽快感についての実態調査

―陰部洗浄と陰部清拭を比較して―

キーワード：陰部ケア、陰部洗浄、陰部清拭、爽快感

C棟8階　○吉川智絵　上東由季　柳原佳世子

Ⅰ.はじめに

陰部は外尿道口付近では粘膜で構成され、粘液の分泌腺が多数開口しているため分泌物が多く常在菌も生息している[1)]。A病棟では、自身で陰部の清潔が保てず、尿道留置カテーテルを使用していない患者に対して、陰部洗浄後 TENA®ウェットワイプ（以下ウェットワイプとする）による陰部清拭を週2回実施し、それ以外はウェットワイプのみの陰部清拭を行っている。しかし陰部清拭のみでケアを受ける患者は不快でないのか、爽快感を感じることができているのか疑問に思い、陰部洗浄と陰部清拭ではどちらが患者にとって爽快感を感じることができているのか明らかにしたいと考えた。

Ⅱ.目的

陰部洗浄と陰部清拭では、どちらが患者にとって爽快感を感じることができているのか明らかにする。

Ⅲ.研究方法

1.研究デザイン：量的記述的研究　実態調査研究

2.研究期間：平成28年12月20日～平成29年1月19日

3.研究対象：意識清明で爽快感を NRS で表現でき、陰部の清潔が自身で保てないA病棟の患者8名

4.データ収集方法：陰部洗浄と陰部清拭実施前後の爽快感を NRS(0 が「爽快感がない」、10を「爽快感がある」)で表現してもらい、1人の患者に対して陰部洗浄1～2回、陰部清拭1～2回を1週間の内に実施する。

5.分析方法：陰部洗浄実施前後の爽快感についての NRS の差、陰部清拭のみ実施する前後の爽快感についての NRS の差を集計し、ウィルコクソン符号順位和検定にて分析を行った。

Ⅳ.倫理的配慮

本研究にあたり、奈良県立医科大学医の倫理審査委員会の承認を得た(承認番号:1438)。期間中対象者に対して研究の目的と方法を文書及び口頭で説明し、同意書の提出により同意を得た。また、研究への参加は自由であり、研究の協力の有無による不利益が生じない事を説明した。

Ⅴ.結果

対象患者8名全てに同意が得られ、のべ13回実施した。

1.陰部洗浄実施前後と陰部清拭実施前後の爽快感についての NRS 値(図1)

陰部洗浄実施前後と陰部清拭実施前後の爽快感についての NRS 値を表1に示した。全ての患者が洗浄・清拭実施前より実施後に爽快感を感じる又は爽快感に差はないという結果となった。爽快感に差がなかった患者は実施前の NRS が10であり、実施後も10であった。

また、洗浄・清拭実施前の平均値と実施後の平均値を図１に示すと、洗浄前は 6.846、洗浄後は9.307、清拭前は6.077、清拭後は9.153であった。双方共に実施後の方が爽快感を有意に感じており、ウィルコクソン符号順位和検定にて有意に差があることが明らかとなった。

２.陰部洗浄と陰部清拭前後の爽快感についてのNRS値の差

陰部洗浄と陰部清拭実施前後の爽快感についてのNRS値の差については有意差が認められなかった。

表１　陰部洗浄実施前後と陰部清拭実施前後の爽快感についてのNRS値

	洗浄前	洗浄直後	(洗浄直後)−(洗浄前)	清拭前	清拭直後	(洗浄直後)−(洗浄前)
A1	6	9	3	6	7	1
B1	8	10	2	6	10	4
C1	3	9	6	2	8	6
D1	9	10	1	9	10	1
C2	6	10	4	7	10	3
D2	9	10	1	9	10	1
E1	3	10	7	2	10	8
E2	10	10	0	3	10	7
F1	9	10	1	10	10	0
F2	10	10	0	7	9	2
G1	7	8	1	8	9	1
G2	6	8	2	7	9	2
H1	3	7	4	3	7	4

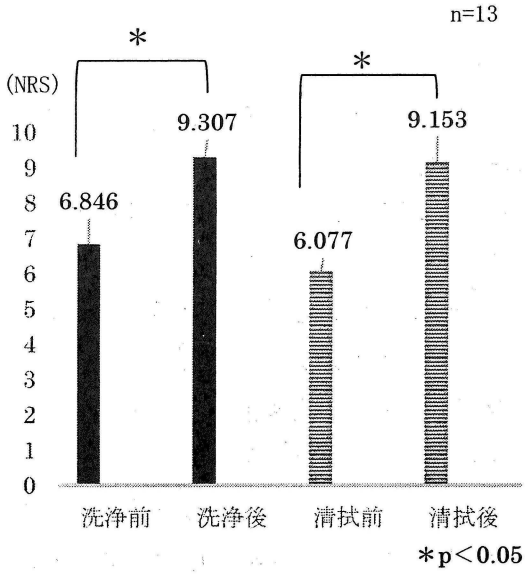

図１.洗浄と清拭の爽快感の比較

Ⅵ.考察

１．陰部洗浄実施前後と陰部清拭実施前後の爽快感についてのNRS値

ケア実施前の平均値は高く、実施前から爽快感のNRSが10であった患者もいたことから、ケア実施前に陰部不快感をあまり感じていないという結果が得られた。毎日必ず洗浄か清拭どちらかの陰部ケアを実施しているため不快感を生じていなかった可能性もあるが、下着の種類や排泄の有無が結果に影響した可能性も考えられる。ケア直後の平均値は９を超えており、有意差が得られたことから、陰部ケアを実施することで爽快感が増すことが明らかとなった。

２．陰部洗浄と陰部清拭前後の爽快感についてのNRS値の差

実施前後の爽快感で比べると陰部洗浄と陰部清拭に有意差は認められなかった。ウェットワイプには清潔・保湿・保護の効果があり、洗浄に比べると時間が短縮され、患者の羞恥心が軽減されるというデータが得られている[2)]。また、中川は「石鹸による陰部洗浄は使用方法によってはスキントラブルの要因となる」[3)]と述べており、清拭による陰部ケアは洗浄に比べると身体的・精神的負担が少ない可能性がある。しかし、竹尾は「感染予防のために最低でも毎日行うことは必要であり、ベッド上で排泄する患者では、排泄のたびに陰部洗浄をする必要がある」[4)]と述べている。現在尿道留置カテーテルを使用していない患者の陰部ケアの方法や回数について明確に研究された文献はないことが現状であり、陰部ケアの方法・回数を正確に設定することは困難であると考える。病棟では現在週２回の陰部洗浄、他ウェットワイプによる陰部清拭を実施しているが、今後爽快感だけではなく尿路感染予防、皮膚・粘膜のトラブル予防、悪臭予防などの観点から陰部ケアについて研究を行

っていくことでよりよいケアへと繋げることができるのではないかと考える。

Ⅶ. 結論

1．陰部洗浄、陰部清拭による陰部ケアを実施することで陰部の爽快感は有意に上昇する。
2．陰部洗浄と陰部清拭で得られる爽快感に差はない。

Ⅷ. 研究の限界

今回の研究対象者は、意識清明で、爽快感を NRS で表現でき、入浴困難で、陰部の清潔が自身で保てない患者としていたが、データを収集する中で同一患者でも日によって NRS に差がみられていることもあり、他の要因が影響している可能性がある。工藤らは「男性より女性の臀部汚染が高い傾向にあったが，有意差はなかった。」、「オープン型のおむつ使用患者の臀部汚染がパンツ型使用患者より高い傾向にあったが， 有意差はなかった。」[5]と述べており、性別やおむつ使用有無によっても陰部ケアによる爽快感に差が生じるのではないかと考えられる。また、宮嶋らは「おむつ内排泄が常時である高齢者の臀部は、尿や便失禁による湿潤状態になることが多く、臀部皮膚バリア機能に影響をおよぼし、皮膚障害や褥瘡の発生リスクを高めると考えられる。」[6]と述べている。実際に排泄方法による陰部の汚染や爽快感を比較した文献はなかったが、尿器排泄の患者に比べておむつ内排泄の患者の方が陰部の汚染が強く結果に影響した可能性も考えられる。以上のことから患者背景を捉えることが必要であった。

＜引用文献＞

1）村中陽子, 玉木ミヨ子, 川西千恵美：学ぶ・試す・調べる　看護ケアの根拠と技術, 医歯薬出版株式会社, p70, 2012.

2）TENAホームページ：「TENAウェットワイプ」, 2016/10/19, http://www.tena.co.jp/professionals/productspavilion/productslist/wetwipe/.

3）中川嘉子：ベッド上での陰部洗浄の検討 石鹸洗浄を連日から週１回にした場合のスキントラブルの比較, 日本創傷・オストミー・失禁管理学会誌, 14（1）, P82, 2010.

4）竹尾恵子：看護技術プラクティス第２版, 株式会社学研メディカル秀潤社, p204, 2012.

5）工藤 綾子, 小川 妙子, 稲富 恵子：おむつ使用患者の臀部細菌汚染状況と清潔方法の検討　その１, 順天堂医療短期大学紀要, 13, p11 - 20, 2002.

6）宮嶋 正子， 大杉 きく子, 岸 栄子他：おむつ内排泄高齢者の臀部皮膚バリア機能からみた皮膚保護ケアに関する研究, 日本創傷・オストミー・失禁ケア研究会誌, 13（1）, p53, 2009.

7）藤野彰子編：新訂版看護技術ベーシック, 株式会社サイオ出版, p243, 2015.

8）川島みどり：看護技術スタンダードマニュアル, メヂカルフレンド社, p328, 2012.

9）川口孝泰 編：清潔の援助技術, 中央法規出版株式会社, p27-29, 2003.

10）山本洋子：床上臥床状態にある患者への看護技術「陰部洗浄」に関する学習教材の状況, 関西看護医療大学紀要, 5（1）, p37-41, 2013.